『長崎国際大学論叢』 第７巻　2007年１月　13頁～22頁

大名茶の系譜
――武辺の茶の統治機能――

安　部　直　樹
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

要　旨
中国より渡来した茶は、僧侶、公家、武士等に広まっていき、やがて足利、織田、豊臣らの大名によって茶道として定着していくのであるが、公家の茶、町人茶、大名茶はその理念、形態等に多少の違いがある。更に織田信長、豊臣秀吉の茶と織部、遠州、石州等の茶道にも若干の相違がある。ヘウケモノとしての古田織部、綺麗さびを特徴とした小堀遠州、武士のあつまりである分相応の茶の片桐石州、この３人の茶道をとりあげ大名茶としての理念にせまってみた。

キーワード
町人茶、公家の茶、大名茶、織部、遠州、石州

はじめに

茶道は一般的に利休後、織部、遠州、石州を中心とした大名茶、小庵、宗旦より三千家に引き継がれた町人の茶、それに金森宗和らによる優美で独特の茶を形成した宮廷茶がある。本稿においては、織部、遠州、石州の茶を取り上げ、大名茶としての特徴を解明してみた。

Ⅰ．茶道分形

茶道が町人茶、公家の茶、大名茶という明確な区分を持つことは難しいが、ここでは敢えて三つの茶道の形を取り上げ、特徴を示してみた。

⑴　町人の茶

『裏千家茶道』[1] によると、茶の修道体系を七つの領域に分けて、

一．客のもてなしが身につきます
二．立ち居振る舞いがよりきれいになります
三．日本の昔からの儀礼や慣習を知ることができます
四．美に対する感性が磨かれます
五．心身を含めた健康との関わりが注目されます
六．日本文化を学ぶことは国際社会への適応能力を高めます
七．茶道の根本には相手を敬い、相手と共に一座建立するという精神があります

ということを述べている。この七つの領域は、ほとんど茶はもてなしであり、茶会を通した客への最高の配慮が、茶の心であると解することができる。また、『茶の心』[2] において、千宗室は、利休の「四規七則」を述べ「夏は涼しき、冬暖く、炭は湯のわくように、茶は服のよきように、刻限は早めに、相客に心せよ。花は野にあるように、降らずとも雨の用意」を取り上げている。一方、利休の南方録の一節「叶ふはよし、叶いたがるは、あしき。」や井伊直弼の一期一会の精神を取り上げており、いずれも茶道が客を対極においていることを強調している。利休の「客亭主、互いの心持いかように得心し

て、然るべきや」（『南方録』）の理念が浸透している。ここに町人茶の原点がある。

⑵　公家の茶

公家の茶という独特の茶があるかというと、その範囲は狭いものである。もともと公家社会が閉鎖的であったという関係上、公家の茶は「隠逸性」と「寄合性」をその特徴としている。しかし、他面、織田信長より始まった禁中茶会、正親町天皇の御所で関白秀吉が行った「口切」を基本にした禁中茶会など公家の茶会としての存在感は歴然としている。

公家の茶の特徴は、掛物では、明、清代の書や絵画、また、古筆和歌、焼物は仁和焼（御室焼）音羽焼、野上焼などの公家好みが使われたが、「隠逸性」の為に広がりをみせることはなかった。

茶道一般の広がりというより、特異な人物、後水尾院、正親町天皇、明正天皇、後西院近衛家熙等によるもので、公家の茶を称して「御流儀」[3] と呼ばれるようにもなったが、やがて玉露の方へ関心が移り、煎茶と呼ばれる茶へと移行していくのである。

⑶　大名茶

江戸後期になると、必ずしも大名茶や利休系のわび、公家茶という大きな系統はなくなっていき、茶道という大きな流れの中に収束されていく。例えば、千家の茶匠達は、やがて田安家、尾張徳川家、紀州徳川家、加賀前田家、伊予松平家などの大名家に茶道役として出仕していく。もともとの出所は混在の中にある。従って、ここであえて、大名茶を取り上げるのは、かつて大名茶として茶道界の重鎮をなした、古田織部、小堀遠州、片桐石州の茶であり、大名茶としての特異性に迫ってみた。

大名茶の走りは、織田信長であるが、この時代は戦乱まだ収まる気配がない時期であったので、茶会は戦略の一つとしたものであった。すなわち、唐物をあつめ、自己の権勢を誇示し、戦功の褒美とし茶道具を分け与えるというものであり、利休の求める「わび」「さび」と縁遠いものであった。

信長に続く秀吉は、利休の協力もあり、彼独特の茶道を作り上げるのである。利休のわび茶に理解を示しつつ、一方で、関白としての権力者として唐物中心の茶を求めることもできた。そのような意味では、信長、秀吉の茶は、権力者の茶であり、後に続く、大名茶とは一線を画している。

Ⅱ．大名茶として流派

⑴　古田織部―ヘウケモノ―

のちに「利休七哲」と呼ばれるようになる利休の後継者のうちのひとりである古田織部（1544～1615年）は、天正13年（1585）山城国西岡城主となり、慶長３年（1598）伏見に隠居してのち、慶長15年（1610）徳川秀忠に点茶式を伝授している。古田織部は、元和元年（1615）６月に、豊臣方内通の嫌疑を受け切腹した。彼が茶人としての評判を高めるのは、伏見に隠居し望覚庵で茶の湯に没頭するようになってからである。

古田織部は、将軍秀忠の数奇の御成りの茶を支えたが、一方、彼の内面に湧き上がる創作意欲の高まりが、利休の茶とは違った形を創り出していった。この二面性が、大名としての俗世を生き、茶人として境地を生きる織部の姿でもあった。

黒田長征に仕えた神谷宗湛（1551～1635）は、『宗湛日記』[4] 慶長４年（1599）２月28日の條で、伏見での古田織部との茶会の様子を、

> 三テウ大目ニ、ツリ棚二重也、上ニ炭斗、ツリ竹ノ本ニ貫アリ、ヰロリ二新釜ウハ口、五徳スヘ、手水ノ間ニ床ノ文字ヲ取テ、カゴ二白玉生テ、土水指　柄杓壁二懸テ、高麗茶碗ニ道具仕入テ、肩衝、袋ニ入、段子、水履ハセイシ（青磁）　引切
>
> 　一墨蹟ハ、一山也、立ナリ、右ノ下ニ一

山トアリ、
一釜ハ、新也、ウハクチ（妮口）ノ大釜也、カラカネ蓋、平大也、是ハ吉野二テホリ出、ソレニ釜ヲ仕合ラレ候ト也、
一肩衝ハ、セト也、薬黄ニシテ下ハル也、辻堂ト申也、袋ハ段子、緒ツカリ紅也、
一カゴ花生ハ、高一尺二三寸、肩二トリテ（取手）付、下ハヒシ（菱）ナリ也、クチハ丸シ、
一炭斗ハ、ヘウタン、筋クワエ、貫鐵、香合今ヤキ　羽靏
一水指ハ、セト、一水履ハ、三足ノ青磁也、
一茶碗ハ、高麗也、大ニシテ口シメ下ハル、カキメ有テ、紋ハカラ草也、ホタン（牡丹）カ、青磁ノヤウニシテ、コヨミ（暦）ノ手也、
一ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケ（道化）モノ也、
　一数奇屋額、凝碧亭
一　手水所ハ、堀テ、大石也、ヒシヤクヨコニ也[5]、

と書いている。「ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケ（道化）モノ也」という宗湛の理解が、後生定着し、「ヒツミ」をもつ織部の意表をついたデザイン好みが、「ヘウケモノ」として評されていったのである。翌日も伏見で宗湛は織部と茶を楽しんでいるが、そこでも、

茶碗ハ、高麗也、コヨミ手也、ヒツム、式ヲ四ツニハサミ候、ヘウゲモノ也[6]

と記している。宗湛は、大きくひずんだ茶器の形容をおどけた道化のように受け取っており、織部の美意識に馴染めなかったことが分かる。

織部は茶碗のみならず、彼の創作力は、あらゆる茶道具に及んでいる。道具組には唐物を用いることは少なく、新製品が多く、建水に三足の青磁を用いている。また、織部は利休が用いた躙口を通らず、通い口から書院へ通すこともあったし、『宗箇様御聞書』によると、「三畳台目席に通い、一畳を付属させる設備を織部格とよぶ」[7] と記しており、出入りの口も四つ（躙口、茶道口、通い口（二つ））を設けている。織部はまた、「茶の道は時の移るによりて改むる事あり。最もこれが肝要なり」と『古織喫茶録』[8] で述べている。彼の、利休とは趣を異にする創造力は、大名として現世の変化を的確にとらえて、臨機応変に対処する為政者としての茶が読みとれる。また、徳川家茶道師範としてありながら、かつて秀吉の恩恵を受けた武人として大阪夏の陣で西軍に味方したことも武将としての魂が感じられる。

⑵　小堀遠州―奇麗さび―

小堀遠州は、天正７年（1579）、近江国坂田郡小堀村にて在村土豪である小堀正次の嫡男として出生し、幼名を正一（のちに政一）といった。通称作助ともいい、宗甫・弧蓬庵と号した。浅井長政の家臣であった小堀正次は、秀吉に仕え、徳川家康とも親しく、関ヶ原の戦いでは東方に加わり、その論功によって、慶長５年（1600）備中松山城に入るところとなった。関ヶ原の戦いからほどないころである慶長９年（1604）、小堀遠州が小堀正次の死去によりその封を継いだのは、遠州26歳のときであった。襲封して２年後には、御陽成院御所の作事奉行を命ぜられている。遠州は普請奉行として、秀吉、家康、秀忠、家光に歴任し、その手腕を認められた。遠州の手がけた仕事としては、大阪城本丸、二条城二丸、江戸城西丸、駿府城、名古屋城天守閣、仙洞御所、禁裏御所（後水尾天皇）、女御御所（徳川和子）等がある。彼が手がけた代表的な茶室は、大徳寺龍光院の密庵、龍光院弧蓬庵の忘筌、南禅寺金地院の八窓の席などである。茶の湯については、古田織部とは、慶長８年（1603）５月ころから慶長17年（1612）７月ころまでの10年に満たない師弟関係であったが、短かったがゆえに密度が濃かっ

たものと思われる。また遠州は大名ではあったが、八条宮智仁親王や近衛応山などの公家衆とも親交をもち、歌道を冷泉為満に学び、書は定家流であった。晩年の遠州は茶の湯三昧の生活であったという。遠州の弟子としては、松花堂昭乗や沢庵宗彭がいる。徳川秀忠、徳川家光の２代にわたる茶道指南役をつとめた小堀遠州は、天保４年（1647）２月６日、伏見奉行屋敷で69歳の生涯を閉じた。

遠州の生きた時代は、徳川家盤石の時代の萌芽期であり、戦乱もやみ太平の時代であった。利休が秀吉、信長に仕えた時、また秀吉の残影が残る大阪夏の陣の織部の時代からすると、新しき時代の到来で、遠州の茶も独特の形を作り上げることが出来たのである。

『小堀遠州書捨文』[9] では、

> それ茶の湯の道とて外にはなく、君父に忠孝を尽くし、家々の業を懈怠なく、ことさらに旧友の交をうしなふことなかれ。春は霞、夏は青葉がくれの郭公鳥、秋はいと淋しさまさる夕の空、冬は雪の暁、いづれも茶の湯の風情ぞかし

とされ、封建的徳目を前面に出し、まずは生活基盤をみつめ、それを盤石なものとすべきだとしている点は、遠州の茶の湯を考察する際、避けて通ることは出来まい。彼が有能な官僚大名であったがゆえに、出てくる言葉なのである。そして後段で茶の湯の風情に言及する。遠州は更に、

> 道具とても、さしてめづらしさによるべからず、名物、あたらしとても、かはりたる事なし、古きとて形いやしきを用ひず、新しきとて姿よろしきは捨つべからず、数多きを羨やまず、少なきをいとはず、一色の道具なりとも、幾度ももてはやして、末々子孫までも伝ふる道もあるべし、一飯をすゝむとても、志厚きをよしとす、多味なりとも、主たる者の志薄きときは、早瀬の鮎、水底の鯉とても、味もあるべからず、籬の露、山路の蔦かずら、明くれこぬ人をまつの葉かせの釜の音たゆることなかれ

と続けている。

特に「それ茶の湯の道として外にはなく、君父に忠孝を尽くし、家々の業を懈怠なく…」と述べているのは、遠州が幕府の一吏員として、幕府にふた心ないことを誓いつつ、幕府に忠誠心を示したのは、利休、織部が共に権者に背き、非業の最期を遂げたことによる自戒の思いであったろう。

しかし、後段で述べる茶の心は大名茶として悠々たる泰然自若のおおらかさが見て取れる。また、遠州は茶入、茶碗、花入等を各方面から依頼を受けて作製し、更には茶入の銘などを命銘し、箱書きや漆状などもしたためたものが多数伝えられる。文には、一つ一つ丁寧に“いわれ”や理由を書き送っており、茶への思いが伝わってくる。大名として遠州は茶道の文化を新しく創り、後世に伝えていかねばならないとする気概があったのではないか。それぞれの現地に実際に赴き、窯を作り、陶器の指導をした遠州七窯は、遠州の熱い思いの所産であったろう。事実、遠州七窯として指定された地方の窯は、七窯の名称を得て、今日まで脈々と生き残っているのである。

更に遠州は、

> 一汁三菜、香物、吸物並肴、但花の時、雪の明日は制外たるべし。茶は一服レ、不レ可レ過酒は無量、乱におよぼさず。
>
> 一．茶道に心懸有者、親疎貴賤之差別不レ可レ致事
>
> 一．此道に志有もの。自讃嫌他不レ可レ致事
>
> 一．吾師は勿論、たとへ他流の人たりとも、茶一服のためなれば、呉々も心得可レ申事

一．茶の湯は平生可二心掛一之肝要也

と述べ、遠州が茶道を持って、自身の修養の具とし、処世のための訓練の場と見て[10]、その中に倫理、道徳の思想を織り込んでいることがうかがえる。ともかく、こうした官僚大名という身分と茶の湯の風情という両側面の両立こそが、遠州美学の到達点であった。そうした到達点に至りながらも遠州は、利休的なものを捨てきれずに悶々とする時もあった。遠州の苦悩は、時代潮流に流されていく自分を冷ややかに見つめる眼が備わっていたことから生じていたのかもしれない。奈良轉害郷の漆屋である松屋家三代にわたる茶会の記録である『松屋会記』[11] の寛永18年（1641）の條に、小堀遠州、片桐石州らが会した茶会の様子が、つぎのように記されている。遠州の心が波立っていたことが分かる記述である。

茶初口石見殿、二ケン齋、三遠州、残ハ次第二呑候、筅ニテ茶ワンカタカタト度々ナラシ候也、茶立仕舞テ、今一服トモ不問二仕廻候也、ツホ蓋ノ巣置様、イツモノ如ク、客御茶入ト所望アレ共、無言ニテツホ御出シ候、盆モ袋モ、客ヨリ所望二ヨリ出テ、時、不洗ヲモトノ事（儘カ）二テ、不洗ヲソヘテ出候、袋ハ釘ヨリ取テ、客ノ前ヘホウリ出サレ候[12]

⑶　武辺のわび―大名のための大名茶―

千利休の長男である千道安（1546～1607年）の高弟桑山宗仙（1560～1632年）に茶の湯を学んで、新しい社会に適合した大名のための大名茶を模索していたのが、片桐石州（1605～1673年）である。

石州は、豊臣秀吉の家臣である賤ヶ岳七本槍のうちひとり片桐且元の弟である片桐貞隆の二男として、慶長10年（1605）、摂津茨木に生まれた。幼名を鶴千代・長三郎といい、長じて貞俊と名乗るようになるが、桑山宗仙に茶道を学んで奥義をきわめ、真行草三体の茶法を授けられ、以後貞昌と名乗るようになった。寛永４年（1627）、父貞隆の死によって、大和小泉１万6,400石を継ぎ、その領主となった。寛永10年（1633）、京都東山知恩院の普請奉行を命ぜられ上洛した。普請奉行として京都に滞在するようになった石州は、綾小路柳馬場の自邸に二畳台目の茶室を建て、金森宗和、小堀遠州、松花堂昭乗など多くの茶人と交わった。その間、大徳寺の玉室宗珀やその法嗣玉舟宗璠に参禅し、三叔宗観の号をえている。寛永15年（1938）には、玉舟宗璠のために大徳寺高林庵を建立した。寛永19年（1642）関東郡奉行となり、活躍の場を江戸屋敷に移すことになった。石州は、寛文５年（1665）、普請奉行であり茶を古田織部と小堀遠州に学んだ船越伊予（1598～1671年）とともに江戸城に赴き、４代将軍徳川家綱の所望によって点茶式を行い、柳営秘蔵の名物茶器を鑑定し、懐紙39葉に三百ヶ条をしたためて上進し、柳営茶道の規格を定めた。２代将軍秀忠の茶道師範であった古田織部と小堀遠州、３代将軍家光の茶道師範であった遠州と同様に、４代将軍家綱の茶道師範となったのもこの年であった。諸大名はこぞって石州の流儀に従った。寛文８年（1688）正月に遺書をしたため、同年７月には公職を辞している。寛文10年（1670）家督を３男貞房にゆずり隠居し、茶の湯三昧の生活に入った。延宝元年（1673）11月20日、69歳で没した。

松平不昧の『茶事覚書』[13] によると、

露地数奇屋は宗旦、物数奇好の物は宗甫どの、茶の湯の法は宗関どの、一人にしたらば天下一也。

と述べている。茶庭の露地や数奇屋としての茶室は、千宗旦、茶の道具類は、遠州、茶のあり方や規則などは片桐石州であり、これらを一人で兼ね備えたならば天下一の名人であるという石州は、利休の子道安より教えを受けた桑山宗

仙に茶を学んだが、彼の茶道観は利休の侘び茶を学びつつ、将軍茶道師範という立場で、大名茶の頂点に立つことで多くの大名に石州の茶を流布していったが、侘び茶を大名たるものがただ真似をして数奇ぶってもそれは正当な茶ではなく、“分相応の茶”を提唱した。すなわち武家の格式を重く見る茶を重視した。

石州、五十七歳の折、寛文元年（1661）の『侘の文』[14]、

> 我思ふ処をいはば、炭斗ふくべにて大方知るべし。あばら成る民家の垣根又は埴生の軒にさがりて、天然と侘びたる姿を生まれ得たる者也。彼の顔淵が一瓢の侘たる例しにぞひとしけれ。おのれ様々に形をなし、色々とさびを出す。是生得のさび者にて、人作の及ばぬ所也。宗易是を其儘にて炭斗に用ひ、結構を盡せし座敷又は結構なる道具と、ならべても、聊かはづかしからぬは、茶道具の体を得たるならずして、是とならぶべき。此の道の自然は瓢にぞありけりつらめ。数奇者は爰に眼を付けて、月の夜、雪の朝を楽しまんに、何か美器珍宝を頼むべきや。器物を愛し風情を好むは形を楽しむ数寄者なり。誠の数寄者とは云はれまじ。心を楽しむ数寄者こそ誠の数寄者とは云はれまじ。譬へ千貫万貫の道具たりとも、炭斗ふくべ一つ程の数寄の本意は叶ふまじ。
>
> 思ふに数寄は貧人も成し易く富者もなし難きものにこそあれ。
>
> 数寄に叶ふべき道具
>
> 一釜　炉にも風炉にも用ふべきを
>
> 一炭斗　ふくべ
>
> 一　墨跡
>
> 一茶入　墨塗棗
>
> 一茶碗　楽焼
>
> 一花入　竹の筒
>
> 此外結構なるものも、見事なるもの、面白きものとは申すべきか。数寄へ入たる物とは謂はれまじ。然し是は意味を云ふ也。なづむべからず、とらはるる事なかれ。

茶の湯の極意は、「炭斗ふくべにて大方知るべし」として、「天然の侘びたる姿」の中に、真の侘びの境地を示すのである。この「ふくべ」で石州は、浮瓢軒宗関の異名をもつのである。この炭斗ふくべは「結構なる道具」と比較してもいささかも恥しいものではない。自然を楽しみ、心を楽しむ数寄者こそ誠の数寄者であるという。更に「なづむべからず、とらはるる事なかれ。」と結び、常に新たな緊張感を鼓舞している。

> 石州一畳半の伝[15]
>
> 一畳半の数奇屋、二畳敷也。客三人に不可過候。
>
> 一．勝手の方の一畳に半畳を心にて二つにわり、向の壁ぎわの二つ分へ板を一つ分入れ、残る一つ所へ左右之内へ炉を切り候。
>
> 一．壁は、中ねりを用ひ、青紙にて、腰張可申候。畳の縁腰張の紙と、以申候へば、柿布にて縁可仕候。畳の表琉球表共可然か。
>
> 一．床仕間敷か、掛もの、茶入、茶碗を三つ道具と申候。古人も紙表具、竹の軸を用ひ申候。茶入器棗を袋に入れ用ひ申候。茶碗白高麗か、赤楽の割れ、候を繕ひて用ひ申候。諸事が様成儀にて被思召候様可被仰上候。
>
> 一．会席一汁二菜に仕る事、四角成座敷故、膳は丸盆を心付申候。万物か様成趣にて御考可被成候。
>
> 十月十日
>
> 片桐石見寸　判
>
> 聴務大蔵郷

この中から読みとれる事は、茶室を一畳半としていることである。これは畳が二畳敷であ

り、点前畳の半分は亭主の点前をするところであり、残りの半畳と客畳一畳をあわせて一畳半と言っている。一番小さな茶室をわび茶室としたのであろう。

また、三つの主要な道具は掛物、茶入、茶碗とし、侘道具としての掛物は墨跡であり、棗を袋に入れて用いる茶入を棗にかえている。茶碗も赤楽は繕った割れ茶碗を取り上げており、大名が楽を使い、しかも割れ茶碗を使うところに侘び茶のあり方がみえる。更に、一畳半の会席は一汁三菜では贅沢であると一汁二菜としているが、侘び茶であれば一汁一菜、又は菓子茶でも良いということである。一畳半の席は二畳畳で茶屋が正方形になるから、会席膳は対象的に丸盆でも良としている。

また、『宗関公自筆案詞』には、石州の茶道理念が良くあらわされている[16]。

（一）茶の湯のさびたるは吉、さばしたるは悪敷と申事。大名などの侘びたる者の真似をしてさばしたるは相応せる事に候間さばしたるになり可申す哉と被仰下候はゞ大方埒明き申候。

（茶の湯を意識したり、また人の真似をして、侘びさびを創りだそうとしても、決して良くはない。自己の心がさびたる境地に入ってこそ、又茶も本物となるのである。）

（一）惣じて茶の湯は慰み事にて候へ共、道理は無きものと御心得可被成候。皆々虚成事にて候乍去其の虚を立て奥に真実ありと御さとり恩尤に候。如此茶の道を御立不成候へばむさと面白さに迷ひ、親切もふかくなり結句は茶の湯の道悪敷なり申す事に候

（茶の奥にあるものを悟り、見つけ出し、真実の悟りを取り出す事が、ただ単に茶の面白さに迷うことではないとし、いわば哲学的茶道を求道している。）

（一）其処を能々御合点被成候へば楽の本になり候て武士は武士の道に叶ひ町人は其の家を保つたよりになり貴人は賤敷者にも役に立ち上下をきらはぬ事にて候。身にあらはし手にあらはし言葉に聞ゆる様に仕り候へば本の数寄にては無之候。色をも香をも知る人ぞ知ると可被思召候。

（武士は武士の、町人は町人の財力のある人はそれなりに分に相応した茶をやれば良いと大名らしい哲学を述べている。）

『石州三百ヶ条』[17] は、茶の具体的な手法を主に記述したものであり、特に将軍家の茶道師範として柳営では勿論、石州の弟子達にも伝えたものである。この三百ヶ条全て石州の手によるものであるか否かは議論の多いところではあるが、この点前技術の中にも幾つかの個所に石州の茶への思いが垣間見える。

第１巻67条では、

貴下の下され候御茶にハ、薄茶にても礼を可仕事
貴人被下候御茶ハ、薄茶にても一度之礼を仕候事尤に候[18]。

と述べ、貴人に対する薄茶の礼を失なわないもてなしを述べている。

第１巻90条では、

貴人御茶被下候時の事[19]
貴人御茶被下候時ハ、同輩のやうに道具も所望ハせぬなり、其相客たかひに拝見致し度あいさつゑしやくいたし拝見する也。炭花も同輩のようにほめぬ、相客互にかんし候躰にほめるもの也、又前方に聞合候事ならハ、近習の者なとに其日の道具ハ承置て、其御あいさついたすもの也。

貴人というこの項では、将軍も含まれるが、そうした人々より茶を頂く時は、道具拝見の所

望をしたり、花や炭をほめたりせず、過日、御家来衆に道具等について聞き合わせるものである。こうした考えは、石州が将軍家に仕える身分であることの思いが感じ取れる。

第３巻72条、73条、74条、88条、100条においては、

第３巻72条、

貴人の御相伴の事[20]

貴人の御相伴の時ハ、服紗・新敷手拭たしなミ懐中するもの也、或ハ新敷鼻紙なとも封して懐中すれハ人の用に立もの也、扇子勿論さし候て、貴人へ何そ上り候時、扇子にのせ出すためなり、刀脇さしも刀掛にハかけす、下に立かけ置也、こしりにハ紙を敷置也、さうりなとも同様にたてかけおかぬ也、しかれ共、貴人是非腰かけ候ようにと有之、もたしかたき時ハ、腰かけの上へ上りてかしこまる居るもの也。

（貴人（将軍又は目の上）と同じ茶席においては服紗、手拭、鼻紙等は新しいものを用意し、扇子をもち、何か品を出す時は、扇子にのせて出すこと。又刀掛けにかけずぞうりも立てかけない。貴人が是非に腰掛けるという時には、腰かけの上に上って正座をする。）

第３巻73条、

拝領の道具にて始て御成仕時の事[21]

拝領の道具にて御成仕候定りたる

拝領の道具にて御成仕候定りたる法無之、然共、その拝領の道具をおもとして、外の道具ハ夫より皆輕きものを用る也、或、茶人拝領ならハ、茶碗ハ茶入より輕きを用、茶碗拝領ならハ茶入ハ輕きを用ゆ、茶入にも茶碗にも茶前に棚に飾り置候事也、兎角、拝領の道具を賞翫におもたる事専用也。

（拝領の道具で御成の折の定まった作法はないが、道具は常に拝領の品が一番重いものでなければならない。茶入も茶碗も棚（台子の上棚）に飾りおいて、拝領の道具は拝見して楽しむものである。）

特に将軍への忠誠心が感じとれるが、これは主君と家臣との間でも同様にあるべきだとする考えであろう。

第３巻74条、

貴人申入候時の事[22]

貴人により門までも迎に出候、中くゝりも外へ出候て御礼申也。又ハ相伴遅き時ハ、待合にも久敷待せかたき故、早速御迎に出、内へ入申様にする也。諸事膳部分に亭主より挨拶心付へき事、茶立出候節も、茶立口の外きてもしさり居申候様に致へきなり。

（貴人がみえた折にには、内まで出迎えて礼をもって節する。諸々の事、膳にいたるまで気をつけ、茶を立てたら茶室の外に去って待つほどに気をつかわなくてはならない。貴人に対する礼の一例を挙げている。）

第３巻88条、

真の茶の事[23]

真の茶ハ薄茶也。草の茶濃茶也。夫故、薄茶ハ茶一人一ふく宛也。手前を専に、しつかに略さす第一に立るなり。臺子の時とくと合點すへし。濃茶ハ一服を打寄のむ所略儀也。手前も服かけんを専要にして手前ハ次也。

（真の茶は薄茶で草の茶が濃茶であり、従って点前をしっかりとなし、台子の時には更に慎重に。濃茶は少し略して、また、いかにおいしく点てるかでその次に点前がくるのである。真の茶が薄茶であ

るとするところに石州独特の思いがある。）

第３巻100条、

珠光・引拙・紹鷗の心の事[24]
此三人共に本付所趣向有。
珠光ハ
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮
此心を用、是則さひたる身体を専に用之也。利休愛す。
引拙ハ
淋はその色としもなかりけり横立山の秋のゆふくれ
紹鷗ハ
村雨の露もまた干ぬ槙の葉に露立のほる秋の夕暮
是則すゝきあけてさハやかなる身本也。道安好み紹鷗に本つく也。是、茶の湯根元也。如此いつれも宗匠其本つく處有之て用、後世子弟たるもの此意味を常に可工夫叉也。
（珠光の歌は、さびたる心をあらわし、利休が愛するものであり、引拙は寂蓮法師の歌を用い、紹鷗はススキが吹き爽やかな中、道安も好んだもので、これこそが茶の本音である。後世の茶人はこうした意味をいつも工夫しておかねばならない。）

石州の時代は、戦乱の時代から平穏な太平の時代と移っていった。大名や武士は、刀や鎧を置き、書をひもとき、人格を陶治し、合戦者としての武士からいかに藩や領民を治めるかという為政者としての資質が問われるようになったのである。大名や武士が武闘派として存在を求める時は、生死という境の中で自己の心を練磨し、心形刀流としての心を鼓舞するが為に茶に心の強さを求めた。がやがて太平の時代に移った時、人間としての精神の醸成が他人に影響を及ぼすまでの心の有り様を茶に求めるようになった。これが石州の茶に反映されるのであり、それ故、石州の茶に集まってきたのは圧倒的に武辺の人々が多かった。

勿論、石州が将軍家茶道師範としていることによる影響も大きかった。剣道において、柳生流が将軍家の流派であって盛んになったことと通じるものである。しかし、他面、為政者としての人間形成を茶に禅に求めていこうとしたことも事実である。石州はこれまでみてきたように一畳半の茶室、炭斗のふくべ、一汁一菜、さびたる茶、赤楽の割れ茶碗等、ことさらにわび茶のあり方を強調していたが、一方、将軍指範として、書院の茶を求め、貴人への心組をことさら述べている。そしてそれが「分相応の茶」となっていくのである。

おわりに

「大名茶の系譜」として、特に織部・遠州・石州の茶の歴史の概要を述べてみた。

利休の唱える「侘び茶」は、もてなしの茶であり自己練磨の茶であった。大名茶もまた利休の茶道精神を引き継いでいるとはいえ、そこには大名としての、気概と宿命と統括が大きく投影されている。

古田織部の芸術性は、我こそ茶道の先達者であるという自負が、利休との境界を明確にした。「茶の道は、時の移るによりて改たる事なり」『古織喫茶録』の気持ちに大名としての気概が推察されるが、また豊臣方内通の嫌疑を受け切腹したことも、大名としての悲運を示している。

遠州もまた、新しい茶道への道を示す気概を示すと共に、利休や織部の晩年に思いをはせ、「それ茶の湯の道として外にはなく、君父の忠孝を尽くし、家々の業を懈怠なく…」という気持ちを抱き続けた。

石州は、『石州三百ヶ条』で茶の具体的な手法を述べたが、将軍家の茶道師範として、御成の

茶に気使い、忠誠心を重んじ、分相応の茶を唱えた。ここには、石州の大名としての統括からくる気持ちが伝わってくる。

珠光が「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」の定家の歌を上げて述べているのは、全てわびの境地なのである。決して将軍の茶、大名茶と区別しない「花も紅葉もない秋の夕暮れ」なのであって、そこには「分相応の茶」の存在は無いのである。

しかし、大名はこの“無”の心を求めつつ、他面大名という為政者として将軍に仕え、家臣を治める俗界の責務を背負っていたのである。

古田織部が道具組みにして「ヘウケモノ」と評されたように、彼は利休の茶から脱し、新たな茶の形式を求めようとした。利休が求める深く静かなる茶から、開放的で明るさを強調する茶に変革を促そうとする所に大名としての気概が感じられる。更に遠州は「奇麗さび」を意識し、「いと艶に」という五朝的趣味を謳歌し、新たな茶の形を求め、茶庭、茶道具、更には銘や添書きに到るまで、茶全般に対する影響力を及ぼしている。大名としての新たな茶形成の思いが感じられる。古田織部、小堀遠州には我こそが新たな茶の形成者足りうるとする使命感があるところもまた、大名茶特有のものであった。

追　記

本稿は、国際観光学科共同研究「茶道・鎮信流の歴史的展開に関する研究」（安部直樹、木村勝彦、田渕幸親、嶋内麻佐子）の成果の一部である。なお、前号に「茶道・鎮信流の歴史的展開に関する基礎研究Ⅱ」としたのは誤りであり、上記課題名が正しい。お詫びして訂正する。

注

1）『裏千家の茶道』千宗室，千玄室監修　今日庵発行，2005
2）『茶の心』千宗室編　毎日新聞社刊，1971
3）『公家茶道の研究』谷端昭夫著　思文閣　2005，p362，p357
4）『宗湛日記』千宗室編『茶道古典全集第６巻』淡交社，1962，所収
5）『宗湛日記』『茶道古典全集第６巻』p334-336
6）『宗湛日記』『茶道古典全集第６巻』p337
7）『宗箇様御聞書』『古田織部』矢部良明著　角川書店，1999，p261
8）『古織喫茶録』『日本の茶家』井口海仙編　川原書店，1983
9）『小堀遠州書捨之』千宗室編『茶道古典全集第11巻』淡交社　1962　所収　p137
10）『「小堀遠州」森蘊著　吉川弘文館　1997年　p286
11）『松屋会記』千宗室編『茶道古典全集第九巻』淡交社　1962　所収
12）『松屋会記』千宗室編『茶道古典全集第九巻』p382
13）『茶事覚書』『書名茶道聚錦四』米原正義　小学館　1983年　p148
14）片桐石州『侘の文』野村瑞典『定本石州流　第１巻　片桐石州』光村推古書院　1985　所収
15）『史料による茶の湯の歴史下』能倉功夫著　主婦の友社　1995年　p307-311
16）片桐石州『宗関公自筆集詞』『定本石州流第１巻　片桐石州』所収
17）片桐石州「石州三百ヶ条」千宗室編『茶道古典全集第11巻補遺１』淡交社　1962　所収
18）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p201
19）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p227
20）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p340
21）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p340
22）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p340，341
23）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p346
24）「石州三百ヶ条」『茶道古典全集第11巻補遺１』p349，350